

# 「こと・の」の使い分けに関する再考察

## —スタイルと現場性の観点から—

崔真姫\*

(e-mail : pumpkin98@hanmail.net)

### <目次>

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| 1. はじめに           | 3.1. 「こと・の」のコロケーションの結果 |
| 2. 先行研究           | 3.2. 動詞・形容詞別「こと・の」の出現数 |
| 2.1. 「こと・の」に関する研究 | 4. 「こと・の」の使用に関する実態調査   |
| 2.2. 問題提起         | 4.1. 調査の概要             |
| 3. 「こと・の」のコロケーション | 4.2. 調査の結果と考察          |
|                   | 5. まとめと今後の課題           |

キーワード：こと(KOTO), の(NO), コロケーション(Collocation), スタイル(Style), 現場性(Place Reality)

## 1. はじめに

日本語学分野において「こと・の」は形式名詞として、文末形式として研究されてきており、文を名詞化する補文標識としても盛んに研究されている。補文標識「こと・の」の研究では意味的・統語的な観点から「こと」のみ使用するもの、「の」のみ使用するもの、「こと・の」両方使用するものに分類されている。しかし、「こと・の」両方使用するものに対する説明や研究が十分ではないと考えられる。

また、日本語教育現場においては「こと・の」をどのように指導するかが困難である。「こと・の」両方使用するものについて、日本語学習者に「こと」と「の」がどのように異なるのかを説明するのはむしろ混同させてしまう恐れがある。韓国で出版されている初級向けの会話教材をチェックしてみると、「こと・の」の使い分けについて説明しているものはほとんど

\* 白石文化大学、助教授、日本語学

どなく、「こと」の慣用句といったものに限られているのが現状である。会話教材に紹介されている「こと」と「の」の用例を紹介しておく。

- (1)日本語を話すのが好きです。(○)  
 (2)日本語を話すことが好きです。(△)

『New 스타일 일본어 회화1,5과,p.70』

この教材の中に話し言葉では一般的に「こと」より「の」が使用されるという説明が記述されている。「好きだ」は「こと」と「の」が両方使用するものであるが、「こと」と「の」の違いを話し言葉と書き言葉によるものであると説明している。しかし、話し言葉にも「こと」が好まれる例もある。例えば、よく使われる「趣味」に関する質問である。

(3)A:趣味は何ですか。

B:トンデーモン市場へ行っているろんな服を見ることです。

『New다락원 일본어2,p.53』

(3)では慣用句とみなすことができるくらい「こと」が使用されている。「のです」はモダリティを表す表現であるため、「こと」のみ使用されるが、話し言葉においても「こと」が使用されるようである。ちなみに、(3)の会話を書き言葉にした読解の地文にも「の」が使用される場合もあるので、「こと」と「の」を明確に使い分ける要因として文体が最も重要な要因であると判断しがたい。

(4)宋さんの趣味はいわゆる買い物です。トンデーモン市場へ行っているろんな服を見るのが好きです。

『New다락원 일본어2,p.58』

(4)にも「の」が使用されており、「こと」と「の」の使い分けを話し言葉と書き言葉の違いで一概に説明することは困難である。

「こと」と「の」の違いを説明するために、「文体」が関係しているようだが、他の要因も検討すべきである。例えば、「日本語を話すのが」はその場における具体的な行為を意味し、「日本語を話すことが」はその場における具体的な行為というより「日本語を話すことが可能である」という意味であると解釈できるだろう。

次のような例では「こと」と「の」の使い分けが明確である。

(5)昨日コンビニで友達が漫画を盗み撮っているの/\*ことを見た。

(6)日本の大学院の試験を受ける?のことを考える。

(5)ではコンビニで友達が漫画を盗み撮りしているところを見かけたという事実を伝える場面であり、「の」のみ使える。一方、(6)では日本へ留学するために、大学院の試験を受ける計画があるという発話である。(5)は現場における具体的な行為であるが、(6)は現場と関係ない試験を受ける計画・イベントである。「の」は実質的意味を持たないが、「こと」は元々実質的意味を持っているため、他の機能へと拡大されても意味的な制約が残っていると考えられる。このような現象は文法化における意味制約のルールであり、本来の意味を失い、新しい機能へと拡大されても、元々の語彙的意味によって、制約を持つということである。「こと」は補文標識の機能へ拡大されても、抽象的なものに制限され、使用されるが、「の」は実質的意味を持たない形式であり、補文標識の機能へ拡大されている。「こと」より「の」のほうが使用範囲が広いと考えられる。大嶋・加藤(1999)は「の」は補文標識の機能、「こと」は抽象化の機能として位置づけている。

「の」の機能については形式名詞の機能である「範疇を規定する機能」が「の」にほとんどないことと、連体修飾機能を明示するため「の」が付加されるようになったという起源説から、「補文がそこで終了することを示す」という、補文標識としての機能が主であると考えた。つまり「の」は実質的意味および範疇的意味がほとんどなく、「こと」のように文を抽象化することがないため、具体名詞を補語にとる動詞が文を補語相当句としてとる際に用いられるのである。「の」の分布が限られているのは、このように、名詞性を十分に備えていないためであると考えられる。一方、「こと」は「範疇を規定する機能」を持っているため、形式名詞として扱われると考えた。さらに、「こと」は具体名詞を抽象化する機能をもっていることから、抽象名詞的性質をもっているとした。

大嶋・加藤(1999:8)

以上をまとめると、「こと」と「の」の使い分けには「文体」のみならず他の要因が関わっているように考えられる。本研究ではコロケーション情報抽出システム「茶漉」に収録されたコーパス資料を用いて「こと・の」の使用傾向を分析した。また、野田(1995)・金(2003)を基に「こと」と「の」の使い分けに関わる有効な要因を探るために、日本語母語話者が「こと」と「の」をどのように使い分けしているかを調査した。

## 2. 先行研究

### 2.1. 「こと・の」に関する研究

「こと・の」に関する研究は「こと」のみ使用するもの、「の」のみ使用するもの、「こと・の」両方使用するものに分類されている。

(7) 「こと」専用

韓日関係が一日も早く回復されることを願う。

(8) 「の」専用

飛行機が飛んでいるのを見ている。

(9) 「こと・の」両方

チャンさんが韓国に帰ること・のを知っていますか。

(7)は現場と離れたもので「こと」のみ使用する。(8)は現場における動きを表すもので「の」のみ使用する。(9)は将来韓国へ帰国すると捉える場合は「こと」、現場で行われる動きとして捉える場合は「の」が使用することができる。

「同一場所性」に注目した井上(1976)、橋本(1990)<sup>1)</sup>、佐治(1993)がある。佐治(1993)は「の」を受ける述語は事態を現場のありさま、動きのまま捉え、「こと」は現場から離れて、一つのまとまった事柄としてとらえるものであると述べている。また、「の」のみ使用するものは事態の現場で同時に実現するもの、「こと」のみ使用するものは現場から離れて成立するもの、「こと・の」両方使用するものは現場の動きとしても、一つの事柄としても解釈できるものと分類している。

工藤(1985)は主節の動詞の性質に注目し、「こと」と「の」を分類している。「こと」のみ使用するものは思考動詞、伝達動詞、意志動詞、表示動詞、「の」のみ使用するものは感覚動詞、動作性動詞、「こと・の」両方使用するものは認知動詞、態度動詞をあげている。本研究においても工藤(1985)の分類を参考にする。

(10) 「こと」を使用する動詞

思考動詞 思う、考える、理解する、信じる

1) 橋本(1990)は「の」専用のものは主文の事態と補文の事態との間に、同時性、同一場面性といった意味的「密接性」がある。」と述べている。

伝達動詞 言う、話す、聞く、伝える

意志動詞 命じる、許す、決める、約束する

表示動詞 示す、さす、指摘する、証明する

(11) 「の」を使用する動詞

感覚動詞 見る、見える、聞く、聞こえる

動作性動詞 待つ、手伝う、会う、助ける

(12) 「こと・の」両方使用する動詞

認知動詞 知る、分かる、覚える、感じる

態度動詞 喜ぶ、悲しむ、期待する、あきらめる

(工藤1985:48)

また、工藤(1985)は認知動詞の場合の「こと」と「の」の傾向についても述べている。対象が抽象的なものは「こと」をとることが多いが、対象が感覚的に捉えられる具体的なものは「の」をとることが多いと指摘している。

(13)貧乏人は裁判にも絶望しなければならないことがよくわかりましたわ。

(14)歩いて入りながら画家は梅の匂うのを感じた。

(工藤1985:49)

(13)では抽象的なもの「絶望しなければならない」に「こと」を使用し、(14) 具体的なもの「梅の匂う」に「の」を使用している。

一方、T.T.M(2011)は日本語教育の観点から初級日本語教科書及び教師用の文法解説書では実際使用しやすい表現が含まれていないと指摘している。教科書では「～ことを見る」を使用できないものと記述しているが、実際日本語母語話者は「～ことを見る」を使用している。それに反して、「のに使う/のにかかる」は教科書には記述してあるが、日本語母語話者は実際使用していないと述べている。教科書における記述と日本語母語話者の使用様相が異なる問題点を指摘している。実際日本語母語話者は「こと」と「の」をどのように使用しているかを調べる必要がある。

## 2.2. 問題提起

本研究では野田(1995)、金(2003)の研究を検討する。野田(1995)は佐治(1993)を支

持するが、「同一場所性」の問題点を指摘している。

(15) テニスコートがかわく {の/\*こと} を部屋で待った。 (野田1995:426)

テニスコートをかわくのを待つ場所はコートではなく、部屋である。つまり、同じ場所にいなくても「の」が使えるのである。埋め込み節の事態が起こる場所と、主文の動詞の動作の行われる場所は同一ではない。つまり、「の」は同じ場所にいなくても使用できるのである。また、野田は「こと・の」を使用する動詞の場合、埋め込み節の内容や文脈によって選択されると説明している。

(16) 癖のある足音で、彼女が部屋を出た {の/??こと} を知った。

(17) 友人からの手紙で、彼女が部屋を出た {の/こと} を知った。

(18) 今日は熱があるから、大学に行く {の/??こと} をあきらめた。

(19) 経済的な事情で、東京の大学に行く {の/こと} をあきらめた。

(野田1995:427-428)

(16)では現場にいて、「足音で彼女が部屋から出た」という事実を知った場合は「の」が自然であり、「こと」は使用しにくい。一方、(17)では現場と関係なく、その事実を友人からの手紙で知らされた場合は「こと」も「の」も自然であるという。そして、(18)では一時的な都合により、大学に行くのをあきらめた場合、「の」が自然であるが、大学に行くという具体的な行為を意味する場合は「こと」は使いにくい。(19)においては東京の大学に進学すると捉える場合は「の」も「こと」も自然である。現場と関係ない場合には「こと」が使用しやすくなると考えられる。しかし、日本語母語話者は実際現場と関わるか否かによって「こと・の」のどちらを選択するのかについて検証する必要があると考えられる。

その他、野田は認識の「知る・わかる」、感情や評価を表す動詞「よろこぶ・賛成する」、事態の非実現や終了を表す「やめる」について分析しているが、形容詞は分析していない。

金(2003)は文体の観点から、日本語母語話者を対象に「こと・の」の選択について調査し、報告している。日本語母語話者は丁寧体に「こと」を、普通体に「の」を使用する傾向があり、「こと」は丁寧さを増す効果があると指摘している。特に、丁寧体においては話し言葉と書き言葉の間に「こと・の」の選択に有意な差が認められなかった。

しかし、金(2003)には問題点が2つ挙げられる。まず、調査の方法に問題がある。調査の際、「好きなこととお嫌いなことは何でしょうか」「好きなことと嫌いなことを書く」という指

示文が出されているのが返答に何らかの影響を与えている可能性がある。

次に、調査の結果に対する解釈に関しても問題がある。「好きだ/嫌いだ」の場合、普通体では日本語母語話45名のうち、「こと」を25名、「の」を31名が選んでおり、普通体において、「こと」と「の」の間に差があるとは認めがたい。つまり、丁寧ではない場合にも、ある程度「こと」を使用していると解釈できる。このような結果をどのように説明すればいいだろうか。「こと・の」の選択において、「スタイル」が有効な要因であるか否かについてさらなる検討が必要であると考えられる。

また、(20)より(21)のほうに「こと」が用いられやすいという結果が出ていたが、形容詞「よくない」と動詞「ご存じだ」の違いによるのか、丁寧さの違いによるのかについて検討すべきである。

(20)ご結婚がおそろすぎる {こと≡の} はよくないです。

(21)先生が私がお待ちしていた {こと} の} はご存じではありませんでしたか。

(金2003:161、記号は引用者による)

以上をまとめると、「スタイル」と「現場性」の要因が「こと・の」の使用に関わっているようである。本研究では「スタイル」と「現場性」のうち、どちらが「こと・の」の使用に有効に関わっているかを考察したい。

本研究では野田(1995)の研究から「あきらめる、知る、よろこぶ」を、金(2003)から「好きだ、いい」を用いることにする。まず、「こと・の」のコロケーション<sup>2)</sup>を検索し、品詞別「こと・の」の使用傾向を調査した。また、「スタイル」「現場性」の観点から、実際日本語母語話者が「こと・の」をどのように選択しているかを調査した。

### 3. 「こと・の」のコロケーション

#### 3.1. 「こと・の」のコロケーションの結果

本研究ではコロケーション情報抽出システム「茶漉」を用いた。「茶漉」には「日本

2) コロケーションとはnode(共起関係にある主要語)とcollocate(中心語と連語する語)の習慣的結びつきであり、典型的には名詞・動詞・形容詞および副詞からなる句である。慣用句(いわゆる「イディオム」)と比べ比較的最近、辞書記述に導入されるようになった(STRAFELLA・前川2015:73)。

語自然会話書き起こしコーパス<sup>3)</sup>と「青空文庫<sup>4)</sup>」が収録されている。両方とも「こと」に比べて「の」の出現例が多かった。特に、「自然会話」では「こと」より「の」の出現例が2.5倍多かった。「青空文庫」は「こと」より「の」の出現例が若干多かった。

表1 「茶漉」における「こと・の」の出現比況

	こと+「は/が/を」	の+「は/が/を」	合計
「自然会話」	1,218例	3,190例	4,408例
「青空文庫」	13,139例	18,087例	31,226例

「自然会話」では「ことを」は「考える、みたい、教える」といったものとコロケーションが成立する。「ことが」の場合、「ある、できる、多い、わかった」などとコロケーションが成立する<sup>5)</sup>。「ことが」のコロケーションの結果の一部を図1に示す。

[ことが] 用例数：410 コーパス総語数= 2055432 スパン語数=244 kwコーパス頻度=426						
	tスコア	MIスコア	Gスコア	コーパス 頻度	スパン 頻度	期待 頻度
<b>ある</b>	<b>9.041</b>	<b>3.32</b>	<b>261.13</b>	<b>4435</b>	<b>92</b>	<b>5.2842</b>
<b>できる</b>	<b>3.960</b>	<b>3.86</b>	<b>59.87</b>	<b>563</b>	<b>17</b>	<b>0.6708</b>
わかった	3.879	4.25	64.58	405	16	0.4825
多い	3.602	3.94	50.69	440	14	0.5242

図1 「茶漉」におけるコロケーションの結果の一部

特に、「ことがある」がコロケーションが最も強いという結果であった。「こと」は元々「事」という意味を持っており、意味的機能から文法的機能へ拡大されても本来の意味により制約されると考えられる。一方、「の」は特定の品詞とコロケーションが成立しなかつ

3) 「日本語自然会話書き起こしコーパス」(旧名大会話コーパス)は科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成13年度~15年度研究代表者大曾美恵子)の一環として作成された、129会話、合計約100時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。現在は国立国語研究所に移管され、文字化テキストなどを公開している。以下、「自然会話」と略す。<http://www.telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/public.html>(検索日:2017.2.3)

4) 「青空文庫」コーパスは現代語で書かれたもののみ収録されている。

5) tスコアおよびMIスコアはコロケーションの強度を表す指標であり、数値が大きければ大きいほどコロケーションが強いことを示す。tスコア数値、MIスコア数値とは、コロケーション出力に表示されるために最低限必要な値のことである。デフォルト値はt=2.0, MI=3.0で、これはコーパス言語学でよく使われる目安である(「茶漉」サイトの説明による)。



た。「の」は元々実質的意味がなく、意味制約がないため、制限なくあらゆるところに使用できる特徴があるため、特定の品詞にコロケーションが成立しない傾向があると考えられる。「青空文庫」では「ことは」「できる、なかった、わかる、明らか」といったものとコロケーションが成立している。「ことが」は「できる、わかる、必要だ、多い」とコロケーションが成立している。「ことを」は「言う、考える、知る、話す、忘れる」とコロケーションが成立している。「の」は数少ないが、「のが」は「定法、得策」と、「のを」は「待ちかねない」とコロケーションが成立している6)。

(22)[1]EOSEOS彼はやむをえなければ、お延の忠告通り、もう一返父に手紙を出して事情を訴えるよりほかに仕方がないと思った。EOSEOSそれには今の病気を、少し手重に書くのが得策だろうとも考えた。(下線は引用者による)

(23)[1]EOSEOS「私が三度目に帰国したのは、それからまた一年経った夏の取付でした。EOS EOS 私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。(下線は引用者による)

### 3.2. 動詞・形容詞別「こと・の」の出現数

本調査では「こと・の」両方使用する動詞・形容詞の中で「好きだ/いい/あきらめる/知る/よろこぶ」7)を対象に「こと・の」の用例をまとめた。実際、動詞・形容詞の意味・特性による「こと・の」の使用傾向を垣間見ることができると考えられる。今回の「好きだ/いい/あきらめる/知る/よろこぶ」に現れた「こと・の」の用例は表2のとおりである。

表2 「好きだ/いい/知る/よろこぶ」別「こと・の」の出現数8)

	知る	よろこぶ	好きだ	いい
～こと+	275例(4例)	8例(0例)	10例(1例)	6例(1例)
～の+	189例(8例)	18例(0例)	32例(10例)	26例(6例)
合計	464例(12例)	26例(0例)	42例(11例)	32例(7例)

( )は「自然会話」の数

6) 今後、分析対象である「自然会話」「青空文庫」の他に、多くのデータを分析し、「の」とコロケーションが成立するものを明らかにする必要がある。  
 7) 2.2で述べたように、金(2003)の研究から「好きだ/いい」を、野田(1995)の研究から「あきらめる/知る/よろこぶ」の用例を用いている。  
 8) 「茶漉」にあるコーパスでは「あきらめる」の用例は検索されなかったため、表に提示していない。

「こと+知る」は275例、「の+知る」は189例であった。「こと+よろこぶ」は8例、「の+よろこぶ」は18例であった。「こと+好きだ」は10例、「の+好きだ」は32例であった。「こと+いい」は6例、「の+いい」は26例であった。「知る」は「の」より「こと」の使用が多かった。しかし、「よろこぶ/好きだ/いい」は「こと」より「の」のほうが多かった。認識動詞「知る」は「の」より「こと」のほうに使用する傾向があるが、感情や評価を表す「よろこぶ/好きだ/いい」は「こと」より「の」のほうに使用している傾向が見られた。

一方、「自然会話」では「知る/好きだ/いい」すべてにおいて、「こと」より「の」のほうが多かった。しかし、「自然会話」では「よろこぶ」の例は今回検索されなかった。

(24)[1]EOSEOS俺がレコードを聴くのが好きだってことが、この店の存在理由だと思う」ジャズ喫茶は「主人=店」だといわれる。

(25)[1]EOSEOS彼は、このようにおのれの運命をおのれの作品で予言することが好きであった。

(24)ではレコードを聞く行為、現場性に関係しており、「の」が使用されている。(25)では現場性にこだわらず、運命を予言すると捉える場合「こと」が使用されていると考えられる。「こと・の」の使用において「現場性」が関わっているように考えられる。

## 4. 「こと・の」の使用に関する実態調査

### 4.1. 調査の概要

本調査では「スタイル」と「現場性」が「こと・の」の選択にどのように関わっているのかを検証することを目的とする。本研究における「スタイル」は丁寧体と普通体に分ける。

「現場性」はその場だけに限る、具体的な動作の性質である。現場に制限される動作(現場性+)と現場に制限されない動作・事態(現場性-)に分けられる。本研究では「現場性(+）」は「の」を、「現場性(-)」は「こと」を使用しやすいと予測し、丁寧体には「こと」を、普通体には「の」を使用しやすいと予測する。

要因1は「スタイル」の相違で(丁寧体vs.普通体)、要因2は「現場性」の有無

(現場性+vs.現場性-)である。「こと・の」が両方用いられるものを対象に、「スタイル」と「現場性」の観点から4分類をした。丁寧体・現場性(+)、丁寧体・現場性(-)、普通体・現場性(+)、普通体・現場性(-)の категорияがある。今回は「好きだ、いい、知る、よろこぶ、あきらめる」を対象とする<sup>9)</sup>。

調査の対象者は日本語母語話者52名である。女性は42名、男性は10名である<sup>10)</sup>。今回は性別による分析は問わない。調査方法は質問紙を用いており、問題数は20問である。問題の提示順序は無作為であった。問題の一部を以下に示す。

「こと・の」のうち、(どちらが)適切だと思うほうを選んで、( )の中に記入してください。
I. 丁寧体・現場性(+) 今日は熱があるから、大学に行く( )をあきらめました。
II. 丁寧体・現場性(-) 経済的な事情で、東京の大学に行く( )をあきらめました。
III. 普通体・現場性(+) 今日は熱があるから、大学に行く( )をあきらめた。
IV. 普通体・現場性(-) 経済的な事情で、東京の大学に行く( )をあきらめた。

図2 問題の一部

分析の方法は被験者内2要因分散分析で統計処理をした<sup>11)</sup>。

## 4.2. 調査の結果と考察

調査の結果、全体的に「こと」(367点)より「の」(646点)の使用が多かった。「の」は丁寧体(296点)より普通体(350点)のほうに多く使用していた。一方、「こと」は普通体

9) 野田(1995)、金(2003)の用例を参考に、修正を加えている。

10) 対象者52名の内、34名は日本語教師であり、18名は日本語の教育経験のない日本語母語話者である。今回は対象者の出身地は問わなかった。

11) 分散分析はANOVA(Analysis of Variance)で、3つ以上の母集団がおなじ平均をもつか否かを検定する統計方法である。「の」「こと」どちらかを書いた場合は各1点を与え、「こと・の」両方を書いた場合は0点を与えている。

(157点)より丁寧体(210点)のほうに多く使用されていた。

4つのカテゴリーごとに分析すると、3つのカテゴリーにおいて「こと」より「の」の使用が多かった。普通体・現場性(+)では「こと」より「の」の使用が顕著に多かった。普通体・現場性(+)/丁寧体・現場性(+)では「こと」より「の」の使用が多かった。

表3 2要因における「の」の使用傾向

スタイル 現場性	普通体(350点)		丁寧体(296点)	
	現場性(+)	現場性(-)	現場性(+)	現場性(-)
「の」(646点)	205点	145点	176点	120点

一方、普通体・現場性(-)/丁寧体・現場性(-)では「こと」と「の」の間に差が大きくなかった。スタイルに関係なく、現場性(+)には「の」を使う傾向があり、「こと」の使用が制限されると考えられる。ただし、丁寧体・現場性(-)では「の」より「こと」の使用が若干多く、普通体・現場性(-)では「こと」より「の」の使用が若干多かった。つまり、普通体には「の」が優先使用されており、丁寧体には「こと」が使う傾向があると考えられる。本研究の予測を支持する結果となった。

表4 2要因における「こと」の使用傾向

スタイル 現場性	普通体(157点)		丁寧体(210点)	
	現場性(+)	現場性(-)	現場性(+)	現場性(-)
「こと」(367点)	49点	108点	78点	132点

統計処理の結果、「の」と「こと」は「現場性」「スタイル」両方有意差が認められた。「の」の分散分析の結果を図3に示す。

Table of Analysis of Variance					
source	SS	df	MS	F	p
subject	81.1730769	51	1.5916290		
A:スタイル	14.0192308	1	14.0192308	10.755	0.0019 ***
error[AS]	66.4807692	51	1.3035445		
B:現場性	64.6923077	1	64.6923077	59.119	0.0000 ****
error[BS]	55.8076923	51	1.0942685		
AB	0.0769231	1	0.0769231	0.133	0.7165
error[ABS]	29.4230769	51	0.5769231		
Total	311.6730769	207			

+ p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.005, \*\*\*\* p<.001

図3 「の」の2要因分散分析の結果

「現場性」において、現場性(－)より現場性(＋)のほうに「の」が使用された(F=59.12, p <.001)。「スタイル」において、丁寧体より普通体のほうに「の」が使用された(F=10.76, p <.005)。「の」の場合、「スタイル」より「現場性」のほうに有意差が大きかったという結果から、「現場性」という要因が「の」の使用と深く関係していると解釈できる。この結果は野田の研究を支持するものと見做せる。

(25)(26)のような「現場性」(＋)に「の」が使用された。

(25)普通体・現場性(＋)

今日は熱があるから、大学に行く(の)をあきらめた。

(26)丁寧体・現場性(＋)

キムさん、結婚がおすすぎる(の)はよくないですね。

「こと」は「スタイル」において、普通体より丁寧体のほうに「こと」が使用された(F=10.01, p <.005)。「現場性」においては、現場性(＋)より現場性(－)のほうに「こと」が使用された(F=68.27, p <.001)。「こと」の分散分析の結果を図4に示す。

source	SS	df	MS	F	p
subject	110.7067308	51	2.1707202		
A:スタイル	13.5048077	1	13.5048077	10.019	0.0026 ***
error[AS]	68.7451923	51	1.3479449		
B:現場性	61.3894231	1	61.3894231	68.269	0.0000 ****
error[BS]	45.8605769	51	0.8992270		
AB	0.1201923	1	0.1201923	0.210	0.6484
error[ABS]	29.1298077	51	0.5711727		
Total	329.4567308	207			

+ p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.005, \*\*\*\* p<.001

図4 「こと」の2要因分散分析の結果

「こと」は「スタイル」より「現場性」の有意差が大きかったという結果から、「現場性」が「こと」の使用にも強く関わっていると解釈できる。

次の「現場性」(－)の(27)(28)に「こと」が使用されている。

(27)丁寧体・現場性(－)

友人からの手紙で、彼女が部屋を出た(こと)を知りました。

## (28) 丁寧体・現場性(-)

父は今までの苦勞が実った(こと)を喜びました。

品詞別4つのカテゴリの結果<sup>12)</sup>を次の表5、表6に示す。「好きだ/よい」はすべてのカテゴリにおいて「の」が使用されていた。

表5 「好きだ/よい」の4のカテゴリの結果

形容詞 カテゴリ	好きだ			よい		
	の	両方	こと	の	両方	こと
普・現(+)	47	1	4	51	0	1
普・現(-)	42	0	10	49	0	3
丁・現(+)	40	0	12	48	0	4
丁・現(-)	36	0	16	40	0	12

表6 「知る/よろこぶ/あきらめる」の4のカテゴリの結果

動詞 カテゴリ	知る			よろこぶ			あきらめる		
	の	両方	こと	の	両方	こと	の	両方	こと
普・現(+)	30	3	19	27	2	23	50	0	2
普・現(-)	14	3	45	5	4	43	35	1	16
丁・現(+)	23	2	27	16	3	33	47	1	4
丁・現(-)	12	4	36	3	3	46	34	0	18

「好きだ/よい」に比べて、「知る/よろこぶ/あきらめる」のほうには「こと・の」を選ぶ傾向があった。「あきらめる」はすべてのカテゴリにおいて「こと」より「の」を使用する傾向が見られた。

一方、「知る/よろこぶ」に「こと」が使用されていた。特に、「よろこぶ」は普通体・現場性(+)を除き、3つのカテゴリにおいて「こと」の使用が顕著に多かった。認知動詞のほうに「こと」が使用される傾向があると予測される。工藤(1985)の分類によると、「よろこぶ、あきらめる」は態度動詞であり、同じグループであるが、「あきらめる」は「の」が、「よろこぶ」には「こと」が使用されており、異なる傾向が見られた。今後、品詞の意味・性質による分析も必要であろう。

12) 品詞別の分析(表5・表6)においては対象者(52名)が「の」「こと」「こと・の」両方を選んだ人数を示したものである。

(29)丁寧体・現場性(+)

父は庭の柿が実った(こと)を喜びました。

(30)普通体・現場性(-)

父は今までの苦労が実った(こと)を喜んだ。

普通体においても、現場性(-)であれば「こと」が使用されやすいことが伺える。「こと・の」の使用傾向をまとめると、「こと・の」の使用において「スタイル」も重要な要因であるが、「現場性」がより有効な要因であると確認できた。「現場性」が強く現れる場合「の」が使いやすく、「現場性」が感じられない場合「こと」が使いやすくなる傾向が認められた。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では「こと」と「の」の使い分けを明らかにするために、コロケーション情報抽出システム「茶漉」を用いて、調査した。「茶漉」では「こと」はコロケーションが多数見られたが、「の」はコロケーションがほとんど成立しなかった。

また、日本語母語話者を対象に「スタイル」と「現場性」の要因が「こと」と「の」の選択にどのように関わっているかを調査した。その結果、「スタイル」においても「現場性」においても有意差が認められた。「こと」と「の」の使用において「スタイル」より「現場性」のほうが有意差が大きく、強く関係していることが明らかになった。「こと」は現場性(+ )より現場性(-)のほうに使用されるが、「の」は現場性(-)より現場性(+ )のほうに使用されている。「こと」は普通体より丁寧体のほうに使用されるが、「の」は丁寧体より普通体のほうに使用される。「こと」は元々の意味の制約によって補文標識として使用される場合も制約があり、現場性(+ )には使用されにくい傾向が明らかになった。「の」は本来意味を持たない特性により、意味の制約がないため、補文標識としても使用範囲が広いと考えられる。

今後、「こと」は丁寧さを増す効果があると認められたが、さらに、丁寧さの度合いによる「こと・の」の使用について追究すべきであろう。また、日本語教育現場で「こと・の」を指導するためには日本語学習者の習得についても調査する必要がある。

### 【参考文献】

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)』大修館書店
- 大嶋秀樹・加藤久雄(1999)「補文標識「の」「こと」の名詞性とその選択について」『奈良教育大学紀要』48-1、奈良大学、pp.1-9.
- 金銀淑(2003)「文体による「こと・の」の選択制限に関する研究およびその活用」『日語日文学研究』47輯、韓国日語日文学会、pp.153-172.
- 工藤真由美(1985)「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』50-3、至文堂編 pp.45-52.
- 佐治圭三(1993)「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から」『日本語学』12-11、明治書院 pp.4-14.
- 野田春美(1995)「ノ、コト—埋め込み節を作る代表的な形式—」『日本語疏意義表現の文法(下)複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版、pp.419-428.
- 橋本修(1990)「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163集、国語学会 pp.101-112.
- STRAFELLA Elga Laura・前川喜久雄(2015)「日本語教育とコロケーション：連語の形で用法を学ぶ重要性」『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所、pp.73-78.
- Tran Thi Minh Phuong(2011)「初級日本語教科書における形式名詞「の」「こと」の考察—教科書内容の再編集を向ける—」*VNU Journal of Science, Foreign Languages*27 pp.192-204.
- 「日本語自然会話書き起こしコーパス」<http://www.telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/>(検索日:2017.2.3)
- 分散分析 <https://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4/>(検索日:2017.8.10)

### 【用例出典】

- 『New 뉴 다락원 일본어2』2002 다락원 출판사
- 『New 스타일 일본어회화1』2015 동양북스출판사

논문 투고 일자 : 2018. 01. 10.
논문 심사 일자 : 2018. 01. 31.
게재 확정 일자 : 2018. 02. 05.



< 要 旨 >

「こと・の」の使い分けに関する再考察  
—スタイルと現場性の観点から—

崔真姫

本研究では「こと」と「の」の使い分けを明らかにするために、「スタイル」と「現場性」の要因が「こと」と「の」の選択にどのように関わっているかについて検証した。日本語母語話者を対象に調査した結果、普通体・現場性(+)に「の」の使用が目立つが、丁寧体・現場性(-)には「の」の使用が最も少なかった。一方、丁寧体・現場性(-)に「こと」の使用が最も多く、普通体・現場性(+)に「こと」の使用が最も少ないという結果が出た。

統計処理した結果、2要因において有意差が認められた。「こと」と「の」の選択において「スタイル」より「現場性」のほうに有意差が大きく、「スタイル」より「現場性」のほうが重要であると考えられる。「こと」は現場性(+)より現場性(-)のほうに使用されるが、「の」は現場性(-)より現場性(+)のほうに使用されている。「こと」は普通体より丁寧体のほうに使用されやすいが、「の」は丁寧体より普通体のほうに使用されやすいことが明らかになった。

「こと」は本来の意味の制約によって補文標識として使用される場合も制約があり、現場性(+)には使用されにくいようである。「の」は本来実質の意味を持たない特性により、意味の制約がないため、補文標識としての使用範囲が広いと考えられる。

Reconsideration of the use of “KOTO·NO”  
- From the perspective of Style and Place Reality -

Choi, Jin-Hui

In this study, I investigated the perspective of "Style" and "Place Reality" situations where the words "KOTO" and "NO" are actually used. The revealed that both "Style" and "Place Reality" are important factors in using "KOTO" and "NO." Specifically, the "Place Reality" factor was more important than the "Style" factor.

However, contrasting the use patterns revealed that "KOTO" was used more in the polite style than the plain style and in actions not on the place reality than concrete actions on the place reality. On the other hand, "NO" was used more in the plain style than the polite style and in concrete actions on the place reality than actions not on the place reality. I interpreted that "KOTO" is difficult to use in the context of concrete actions on the place reality. Moreover, I interpreted that "KOTO" was also constrained by concrete actions on the place reality when used as a functional form of the main text because of the restriction of the original meaning. However, "NO" is used without restriction when it is used as a complementizer, because the original word.